［研究ノート］

Pearl S. Buck を振り返って（まとめ）

佐 藤 重 夫

〈目　次〉

I　初期における文学活動の諸相
II　厳しい批判
III　短編小説について

Pearl Buck の文学歴を要約する際，先ず重要な点は，文学的地位における評価の面である。これまでの私の一連の論考の中で度々述べてきたように，Pearl Buck という作家は，多くの批評家からうとまれ，アメリカ文学界における容認が仲々得られなかったということである。だが，ただ一つ確信をもって言えることは，誰の目からも疑問の余地のない，重要な作品を少なくとも三本は完成しているという事実である。その三本とは，The Good Earth と，父母の伝記である The Exile および Fighting Angel のことである。中でも，The Good Earth は，中国における生活様式全体を力強く，感動的な筆致で叙述した作品であり，後世の人々から長く記憶されるべき秀作であることは間違いない。

Ⅰ　初期における文学活動の諸相

従来，The Good Earth は，どちらかと言えば，軽率な理屈を並べ立てられ，世間の好評を打ち消されそうな企てが，いろいろと行われてきた。例えば，The Good Earth の文学的成功の原因は，世界大恐慌（1929）のころ，貧困と社会不安という背景を主題としたことと，作品内容が当時の風潮になじみ，人々の感情を駆り立てることができたからだ，という考えが多くの文芸批評家の常識となっていた。また，Pearl Buck の死亡の際，発表された雑誌記事の中にも，事細かにこのようなことが繰返し述べられている。[(1)] しかし，この作品が，その後60年経った今日もなお，多くの高校や大学の教材に用いられ，広く世界の人々に愛読されているという事実は否めない。

ノーベル賞受賞の対象ともなった二つの伝記物語，The Exile と Fighting Angel も，異国風土で伝道生活が必要とするもの，その反動の中で捉えた伝道文学としては，最も感動的作品であり，かつ，鋭い分析が加えられている。Andrew Sydensticker は，19世紀における伝道精神の躍動的な，激しい本質をよく表わしており，妻の Carie も世俗的目標と超俗的目標の折衷を絶えず求め続ける人間性をよく象徴している。

その他の Pearl Buck の作品，特に Sons, The Mother, The Patriot, The Time Is Noon にも，感銘を与えてくれる文章が多く散見される。勿論，理想の極致に

達したというものではないが，かなり注目すべき段落や感動的なエピソードが盛り込まれている．

ノーベル賞受賞のころ，つまり，The Patriot (1939) が完成してからの Pearl Buck の文学活動は，ますます波に乗り，それまで以上の業績が，将来に約束されているように思われたが，この時期を過ぎると，人道主義の方向へ心が奪われていくようになった．このような関心事が虚構の中に採り入れられるようになってからは，創作に対する客観性が次第に希釈されていった．従って，作品の中で極度に教訓思想が強調され始めるようになり，Dragon Seed (1942) や The Promise (1943) のような小説は，日中戦争のプロパガンダ作品へと変形していった．もはや，芸術家の客観性を強調した James Joyce の有名な言葉——「芸術家というものは……自己の作品のいたる所に自己を前面に押し出さず，上品に，存在感をなくし，さりげなく，そして，不揃いなものは切って整えておくものだ」——には程遠いものになっている．しかし，このコメントは，初期の The Good Earth にはまさにぴったり適応している言葉ということができる．

1939年以後の Pearl Buck の作品では，筋立て，対話の運び，創作技巧など，様々な側面が，それ以前のものより軽妙であるのは確かだが，創作上の芸術的特徴という面では，これと言った重要な進展が見受けられない．それに，技巧を磨く努力も，登場人物の性格分析を深めている様子も感じられない．文体，あるいは，文体のかもし出す雰囲気の微妙さを積極的に追求しようとする面も感じられない．神話か象徴主義，あるいは，現代特有の創作要素を活用する関心も示されていない．これだけの理由を取り上げても，Pearl Buck が現代の文芸批評家に軽視されがちになるのは当然かも知れない．意識の流れのままに人物の心理描写をする作法や，象徴主義といった点に気配りが見られないことも，理論の展開分析の弱い作家と思われる原因なのかも知れない．

Pearl Buck が，なぜ現代技法に逆らったのかは，大体，想像がつく．出来事や人物描写を強調しようとする，古風な中国型物語の慣行に忠実に従っているからである．だが，ここにも二項対立が見られる．1930年代の最高水準にあった創作には，客観性が充実し，教訓性は殆ど感じられない．たとえあっても，補足的なものに過ぎない．そのような手法による作品は，力がみなぎり，意図

もはっきりしている。ところが，1939年以降の作品には，客観性がぷっつりと切れ，教訓主義が一段と目立つようになり，作品の特性が失われてきている。もし，ノーベル賞受賞後の作品にも中国風技法による作風を維持していたとすれば，1939年以後の作品も，初期の秀作の域に達していたことは十分に想像できる。人道的関心事の高まりが，真実味を失い，教訓主義の強調が，Thomas Hardy（1840—1928：イギリスの小説家）の唱えた「自然の真理」をゆがめる結果となったと言える。晩年の作品になると，ますますセンチメンタリズムが前面に押し出され，この傾向が，結局，最高の芸術性への歯止めとなったのである。その意味から言えば，1967年に出版された The Time Is Noon——多分この作品は，1930年代以来出版された作品のうち，最もリアリスティックなものであろう——は，1936年から1939年までの間に執筆されたのは間違いない。(2)

彼女の晩年の作品は，出来栄えの点から初期の作品に遠く及ばないが，重要な主題や人道的題材に関心を集中したために，単に短命なベスト・セラーに終らずに済んだのであろう。Other Gods, Command the Morning, The New Year などの小説も，極めて重要な問題を提起し，検討課題を提供している。The Hidden Flower（1952）という作品は，いかに国際結婚が困難なものであるかを示唆しているばかりか，アメリカの，ある州で問題にされた反混血法や，その影響などについても詳述している。アメリカの州の中には，白人と黒人間の結婚ばかりでなく，白人と黒人以外の混血との結婚も禁止する法を施行しているところが多かった。例えば，ある州では，特に蒙古人，インド人，アメリカ人・インディアンと指定していたところもあった。このような法律の不合理性や不当性が明らかであるにもかかわらず，それが現に存在し，アメリカ50州の中でも，その半分の州で施行されていたのである。これは甚だ心の痛む問題だが，Pearl Buck は何度となくこの問題を直接取り上げ，ノーベル賞受賞後の作品の中で，特に光を当てた重要なテーマであったのである。従って，大部分の作品を通読してみると，かなりよく完成された，面白い小説以上に注目すべきものが感じられる。例えば，現に人類が直面し，あるいは，将来，直面し続けるような，極めて魅力的な問題を取り上げ，思慮深く洞察している点などである。このことが，彼女の後年の作品に価値を与えているのだが，一般の批評家達は

これを見落しているのである．これについて，Elizabeth Janeway が述べている貴重な論評がある．それには，Pearl Buck の作品が，なぜ多くの読者から関心が持たれるのか，その理由を述べている．少し長いが，重要なので引用しておく．

> Her readership is secure. She has something to say and says it with lucid ease. If she lacks the warmth of humor she makes up for it by the warmth of sympathy. If she has a mission she can also tell a story. She writes consistently and successfully to be read ; …… it is too bad that Miss Buck's audience is, par excellence, the audience which is ignored by contemporary critics of writing. This audience is the American middle-class woman who reads novels. Thirty years ago H. L. Mencken may have been right in seeing her as an idiot who took her attention from her house, her children, and her servants only to gossip about her neighbors. She is not an idiot today.
> If our mores are changing in the direction of tolerance, if our knowledge of the world is broadening, it is she who is accepting the change. It is vital to communicate with this woman, for if literature has first of all the duty of reflecting life truly (I don't mean photographically), it has the second duty of presenting this reflection to as large an audience as possible. For twenty years Miss Buck has done this. It is an excellent thing that she continues to do it so well.[(3)]

Janeway 夫人の，この論評は，Pearl Buck の創作について言及しているのだが，彼女のノンフィクションの分野にも十分あてはまると言えるだろう．「America's Medieval Women」および「America's Gunpowder Women[(4)]」と題するエッセイや，遅進児，養子縁組を描いた作品などによって，Pearl Buck は，想像以上にアメリカ女性に大きな影響を与えているのである．更に，彼女自身 Pearl Buck Foundation, Welcome House, East and West Association などの各機関に参画し，そこで培われた理論改良と人道主義を加味しながら，作品の補強を計ってきたのである．

II　厳しい批判

Pearl Buck が有力な批評家達から評判がよくないのは，小説手法の中に，より近代的な技巧を採り入れようとしなかったこと，ノーベル賞受賞後の作品には，教訓主義が濃厚であるという理由の外に，いくつかの要因が絡んでいる。その一つは，彼女の作品がベスト・セラー的地位にあることへの，厳しい批判的反発である。

ベスト・セラーになり得る人気作家というのは，とかくそねみを受けやすいものだが，特に，多くの愛読者から注目を集めたいと強く望むものからの嫉妬は強い。この反発の一例が，The New Public 誌に載った Helen F. Snow の追悼文に見受けられる。その中で，Snow 女史は，中国の共産主義者は儒教社会の古風な家族制度や，上流社会を賛美する Pearl Buck に大変反感を懐いている，と述べている点である。[(5)] だが，Pearl Buck が事実「賛美している」のかどうか，その論点について巧みに避けてはいるが，Snow 女史が，Pearl Buck に反対する共産主義者の見方に極めて好意的であるのは確かである。その上，彼女は，Pearl Buck の作品が中国人の生活を忠実に描写していない点を強く批判している。これはまさしく，1933年に Younghill Kang が Pearl Buck に対して行った非難を思い起させるもので，以来長い間反論されてきた非難でもあった。[(6)] The Good Earth が文学的に成功した理由は，商売に抜目のない Pearl Buck の夫，Richard Walsh がうまくまとめてくれた上に，かなり性的要素を加えて，興味をそそったためだ，とまで Snow 夫人は言い切っている。Snow 夫人の敵意は，事実をゆがめようとする政治的見解によるものなのである。

また，Pearl Buck が女流作家であるため，文学者としての地位が軽視されていたのも確かである。これについて，彼女自身，かつて次のように述べている。「いかなる分野の女流芸術家も，その作品がどんなに優れていても，男性の場合と違い，真剣に取り扱ってもらえない。と言って，彼女達がかなり好評の作品を数多く出していることも事実なのである。しかし，それが却って，芸術家としての立場を不利にしている」と。[(7)] 更に，同じ文脈の中で Pearl Buck は，ア

メリカの批評家は時折，ヨーロッパの女流芸術家を褒めることがあっても，アメリカの，多くの女流芸術家を真の芸術家と認めるようなことはしない，と書き留めている．しかし，このような批判は，1970年代の「女性運動」のかげにかくれてしまったが，当時の論評を丹念に調べてみると，この事実がはっきりする．Herbert Muller の女流作家に対して見下すような態度や，彼の著書 Modern Fiction の中で述べている「気のない褒め方をして実際にはけなす」ような取り上げ方が，その代表的なものである[8]．

厳しい文学界における Pearl Buck の威信失遂のもう一つの要因は，楽観的で肯定指向の考え方にある．勿論，進歩というものを信じないわけではなく，人間の基本的善性については，フランスの思想家 Jean Jacques Rousseau や，アメリカの愛国的著述家 Thomas Paine のように，一般の常識を越えた強い信念を持っていた．これに反して，わびしい悲観論，苦悩に対する主観的な考え方，人間性に対する厳しい非難といったことなどが，当時の風潮でもあった．このような「苦悩の時代」は，まさに内面世界の虚無的深淵を追求したフランス在住のアイルランド作家 Samuel Beckett の心境を思わせるものだが，この暗い風潮に，Pearl Buck はついて行けなかったのである[9]．彼女は現実逃避者ではなく，むしろ，現代の悪行，抑圧，その他の諸問題をよく見つめ，理解していた．時折，私生活においても，貧困，危機，失望，悲嘆など，いやというほど経験している．だが，気性が肯定的，積極的，楽観的，理想主義的であったため，人間状況における諸相を，より望ましい方向へ押し進めようと努めた[10]．Pearl Buck は，American Argument という論説の中で，「無益で絶望的な本を書く」現代の若い作家のことに触れ，彼等の作品には，「全世界の人々が，初めて共通の衝動にかられ，よりよい生活に向って前進しようとする，人類史上最も感動的な時代でも，なんらビジョンを持たない．現代の青年男女は，自分自身を見つめることだけで精一杯，何も見抜いてはいない」と厳しく批判している[11]．

かなり以前のことだが，Pearl Buck は The Artist in a World of Science と題する雑誌記事の中で，人間が人類同胞主義や，「一つの世界」という概念に向って協力することがあれば，必ず科学の力がすばらしい新生活を築いてくれることを信じている，と述べたことがある[12]．科学的発見という潜在力により，人間

は楽観状態になり得るが，洗練された芸術家というのは，その存在理由を生活や人類に求めながら，希望という枠組の中で働くべきだ，と言うのである。つまり，芸術家は厭世観，絶望観に陥ってはならない，むしろ，将来に対する信頼，生活やその状態を向上できる人間への信頼感をもっと強調すべきである，という主張なのである。イギリスの劇作家 John Osborne の戯曲 Look Back in Anger[13] についても，Pearl Buck はこの作品の劇的効果を認めながら，その視点が欠落していることを指摘している。それは人間の動物性への退化を示唆しているからだと言う。こうした考えは，敗北を意味し，死へ追いやるもので，芸術家の題材は，あくまでも人生でなければならないことを強調しているのである。

Pearl Buck を個人として見た場合，彼女を賛美しないものは恐らくいないであろう。思慮深く，偏見のない目で判断すれば，彼女の視点，人道主義などは賛美されずにはおくまい。かつて，American Argument の中で，彼女は自身のことについて，「私はいつも大きな目標に恋をしている」と，その真相を明らかにしたことがある[14]。このコメントは，Pearl Buck が心情を率直に述べた，意外な事実と言える。それは，思想や行動において彼女の人道主義を要約したものであり，彼女の本質を解く鍵でもあるからである。

Pearl Buck の人道主義的関心事については，世間の当然の賛美の的とは言いながら，願わくば，あれほど多作傾向でなかったならばなあ，という願望もある。だが，書きまくるという衝動にはいかんともしがたかった[15]。金銭を必要としないときでも，ペンの流れだけは抑えることができなかった。執筆は彼女にとって一種の執念（Pearl Buck は，これを心の「重圧」と呼んでいる）のようなもので，洪水のような執筆の流れを自ら抑える気はさらさらなかったのである。もし，数多くの小説の執筆にあたって，思考，推敲，修正などにもっと時間を掛けていれば，実に洗練された作品が完成されていたであろう。更に望まれることは，ノーベル賞受賞後の作品についても，従来の手法に，より豊かな芸術技巧が加味されていたなら万全であったということである[16]。彼女の全集を通読して感じられることは，小説のもつ機能をもっと重視していたならば，後年の作品は，持前の創作力と相俟って主題以上の成果をあげていたに違いない，と

いうことだ．勿論，その気力，力量が十分にあることは確かである．

Pearl Buck が物語性を重視する，古風な中国型創作技巧に従ったのは言うまでもない．しかし，John L. Bishop が伝統的な中国の創作に関する論説の中で指摘しているように，西欧の小説は，口語体形式の中国小説に比べて，登場人物の心情を深く掘り下げようとするので，性格描写が，より詳しく，均整のとれたものに仕上がるのは当然である[17]．中国流の創作には，実体のない，類型的な性格描写の外に，こじつけのエピソードがあったり，起り得ないような出来事が発生したりする傾向があり，どうしても芸術性や説得力が，最高の水準に達し得ないのである．

いずれにせよ，「喜ばせる，慰める……楽しませる」という Pearl Buck 自身の基準で判断すれば，彼女の作品は，かなり成功の域にあると言えよう．ページを繰るのももどかしいくらい面白い本を数多く書き，同時に，社会的，歴史的，主題的に重要な諸問題を自分の創作の中心に据えた，生来の物語作家でもあったのである．

III　短編小説について

Pearl Buck は，世界中で最も広く読まれているアメリカ作家の一人だが[18]，長編小説以外の作品は，あまり批評の対象にはなっていない．しかし，彼女の短編小説は広く世界に行きわたっており，学校の教科書，選集，全集などでも，しばしば増刷され，しかも，初期の短編は，ノーベル賞の受賞対象の地位を獲得する上で，重要な要因となっている．そこで，Pearl Buck を総括するに当たり，これまでの拙論の中で殆ど触れていなかった短編小説についても，総論的に論評を加えておこうと思う．

Pearl Buck の最初の短編小説集 The First Wife and Other Stories が出版されたのは1933年で，編集は三つの主な構成要素から成っている．すなわち，古い伝統的な中国の風習と，新しい西欧の影響との接点を扱う，「新旧」対立の物語と，中国のさまざまな革命活動の実相を扱う物語，それに，1931年に起きた，あのすさまじい楊子江の大洪水を中心とした，いささか教訓めいた四編の小品

などである。

The First Wife という短編は，選集の中で最も念入りに仕上げられた作品で，数年間海外へ留学する若い中国人の物語である。その若き中国人が留学を終え，中国へ戻ってくると，もはや中国の古い風習に関心を示そうとしない。政治活動に心を奪われて都会へ出て行く。故郷にいる妻は，忠実で献身的な女ではあるが，その妻を彼は全く相手にしようとしない。知的交流ができず，教育のある自分の友達の適当なホステス役として務まらないからだというのである。結局，彼は妻と離婚し，子供達を引き取ってしまう。古い中国と，新しい中国との違いをはっきりと対照させた作品である。若い夫 Yuan の強情な我儘さと，妻の感情を全く理解しようとしない態度には，いささか不快感があるが，説得力のある筆致は感じられる。妻の苦しい立場，自暴自棄な気持がうまく描写されている。古い風習に深く根ざされている彼女には，そこからすぐに抜け出すことができないし，感受性が強いため，離婚に黙従することもできない。結局，この苦境から脱する唯一の解決策として，自殺の道を選んでしまう。

The First Wife という，この作品は，Pearl Buck の短編小説の中で，最も注目される代表作で，描写はリアリズムで木目細かく，物語の興味は，全体を通じて保たれている。登場人物も，力強い，信頼感のある筆致で描かれている。その手法は，中国古来の作風にのっとっている。1932年 2 月，彼女は北京で二回の演説を行っているが，その中で伝統的な中国物語を書く場合の自らの手法を明らかにしている。つまり，そのような作品を書く場合，作家はその存在感を打ち出すことはできなくとも，物事を広く知る必要がある，と指摘している。人物描写は動作と台詞によって行われるもので，心の内面を殊更明らかにすることは滅多にない。恋愛物語，筋立て，人物の外見描写などが，Pearl Buck の取り組もうと努めた手法の，主たる特性であったのである。[19]

The First Wife が出版されてから 6 年後，Pearl Buck がノーベル賞受賞のため，ストックホルムを訪れたとき，中国の物語文学の伝統的手法論について受賞演説を行い，この種の小説が自分の作品に少なからず影響を受けたことを繰り返し述べている。[20] このときも，作者の分析よりも，人物動作の重要性，および，台詞と動作から生れる人物描写の効果について強調している。彼女によれ

ば，中国の一般の作家は，技法に殆ど関心を持っていない，技法にこだわれば，「優れた作家も，その命運も尽きて，単なる文筆技巧者に過ぎなくなる」というのである．

Pearl Buck は，文学経験から，記憶，巧妙さ，あるいは，最近の短編によく見られる内面分析を興味深く絡ませるというような手法を用いようとはしなかった．例えば，多くの新進短編作家が間接手法でも，彼女は直接手法をとったり，前者が微妙に慎重な表現であれば，彼女は明確な描写を使い，また，彼等の文体が詩情や含蓄に富んだものであれば，彼女のそれは簡潔で，単に実際的なものになる，といった具合である．進歩的な短編作家の作品を読み慣れている者であれば，Pearl Buck の作品に現代作家の秀作に見られるような，色調の概念，雰囲気の強調，物悲しい詩情，それに，主題，雰囲気，言葉の混成といったものが感じられないことに気づくであろう．Pearl Buck の短編から，文体や手法の微妙なニュアンスを求めようとしても無理である．

最近の短編小説の形態に比べると，Pearl Buck の短編は，古風ではあるが，魅力的価値がある．彼女の念頭にない基準判断で，その作品を評価するのは適当ではない．むしろ，優れた現代作家が価値のあるものと考える手法を少しでも取り入れれば，彼女の作品もぐっと改善されるぐらいは指摘されてもよいのではないか．

この点については，The First Wife 短編集の中の最も効果的な作品を読めばわかる．その作品とは The Rainy Day という短編だが，主人公は Teh-tsen という名の，若い中国の学生で，アメリカの大学に留学している．彼はすばらしい卒論を書き，この大学創設以来の秀才の一人と思われている．卒業すると，祖国の発展に尽そうと中国へ帰るが，帰国早々，彼は子供のときに婚約した娘と結婚し，高齢の親類や自分の兄の生活を助けるよう，家族から言い渡される．そのためには，早く Teh-tsen が高給取りの教師の職に就くよう強要される．彼はそんなしがらみにしばられたくないと思っているが，さりとて，このジレンマから抜け出るよい術もない．このような失望的な現実に直面しては，自分の理想の実現も程遠い．彼はアヘンを求め，先祖達がこの世の不正や残酷から逃避したいと思ったときに行ったアヘン常習への道へと入っていく．

Teh-tsen が直面する主なジレンマは雨天の日に集中する。彼の生活のうっとうしさ，心の憂うつさは，まるで連日降り続く雨，空気の肌寒さ，路上の泥やゴミへの重圧感のようなものである。この物語の雰囲気は，Teh-tsen 自身の空虚さと全く符合している。そのため，The Rainy Day という作品には，かなり完成度の高い格調の力強さと深さがうかがえる。性格描写と雰囲気が融合し，相互に補強し合っている。全体的な印象としては，感動的で力強いものがある。

The First Wife 短編集の中の新旧対立をテーマとした，その他の作品の中で触れておかねばならないものが二編ある。Frill と Pepatriated である。Frill はほかの選集にも収録されているが，この作品の主な特徴は，人間よりもカリカチュアにある。内容は，中国の貧しいテーラーを脅して，凝ったフリルの付いたドレスを作らせる，裕福なアメリカ女性の物語である。このテーラーは，逆境のもとで長いこと辛抱しながら，ドレスの仕上げに努力するが，それに見合うだけの工賃が払ってもらえなかったばかりに，仕方なくその後の注文を断ってしまう。この物語には，登場人物の誇張，内容自体の過度の簡略化が見られるが，それは，読み終ったあと心に残る風刺の痛烈さが，十分補ってくれている。西欧人による虐待，中国人からの搾取という恐怖の様子が，このアメリカ女性 Mrs. Love を通じて，まざまざと感じられる。しかも，テーラーの窮地を全く理解しようとせず，ただ冷然としている彼女の態度が，その残酷無情さを引き立てている。

Repatriated という短編は，フランス女性と中国人との結婚について描いた作品である。二人はフランスで結婚し，中国で生活する。中国で暮す妻の Mathilde は，寂しく，ホームシックになる。毎日経験する貧困生活や，中国の生活様式には我慢できない。自分はフランス女性として，中国人の夫よりも人種的に優れていると思い込んでいるのだが，実際は，夫の方がずっと思い遣りも，教養もある。結局，彼女は夫を見捨てて，フランスへ戻るが，帰国してみると，自分の両親や昔の求婚者，それに，家族の誰からも，予想以上の素っ気ない態度をとられる。この作品は，彼女がフランスでの生活や，夫のことなどを思いめぐらす場面が，詳しく描き出されているが，彼女の人種的傲慢さの弱点や，中産階級を装う態度が，くっきりと浮び上っている。この物語は，Mathilde が自

分の行為を自ら強く責めることで終っているが，簡潔鮮明な結末を必要とするところを，不必要な描写で間延びさせてしまっている．

The First Wife 短編集の第二部は，革命をモチーフにした四編の作品から構成されている．その一つ The New Road は，The First Wife や The Rainy Day の水準には及ばないが，このグループでの最も成功している短編である．中国における1926年～27年の革命期のあと，蔣介石は首都を南京に定めて，近代都市を築こうと決心する．幅広い，近代的な道路を建設するため，沢山のブルドーザーを使って古い家並みやビルを取りこわす．西欧教育を受けた，進歩的な中国人は，この計画に賛成し，建設作業に協力するが，家や店舗を破壊された一般の人々は，新政府の行う活動に憤慨する．The New Road というこの作品は，破壊や新建設が，南京の町角で給湯店を経営する Lu Chen という男にどんな影響を及ぼしたかを扱ったものである．家族が何世代も受け継いできた自分の職場が，取りこわされているとはどうしても信じられない．しかも，息子がこの道路工事に参加する決心を知ったときの衝撃は大きかった．だが，息子や政府雇用者は，町が発展し，自動車が町中を走り回るという，予想もつかない近代化に夢を抱く．Lu Chen はこのような新開発に全く狼狽する．自分の生活は滅茶苦茶にされたが，しかし，このおかげで息子の怠けぐせや，不甲斐なさに終止符を打つことになる．息子は今や人生に目標ができ，張りがでてきた．この短編は，すばらしい物語を構成する要素もあるが，欠点もはっきりしている．その矛盾があまりにも簡単に描かれている．Lu Chen の苦境はよくわかるのだが，それだけではいくら想像力をたくましくしても，その状況を，より感動的なものにしてくれるものが感じられない．この物語にはリアリズムがあり，持ち味があり，信憑性もある．だが，The First Wife 短編集の大部分の作品同様，読者の想像力を刺激して，捉えるだけの描写力に欠けているようだ．

Pearl Buck の第二の短編集 Today and Forever (1941) は，最初の短編集ほど完成されたものではない．この短編集の冒頭で Pearl Buck は，「この選集は，特殊な構成形式をとっている」と述べているように，物語は古い中国の諸相に始まり，次いで，新時代の中国文明に及ぼす影響へと展開し，最後は日清戦争の時代へと導いていく．更に彼女は，祖国の侵略者への抵抗で示すような，不

撓不屈の中国人の特質も描写したい，と述べている。

Today and Forever 短編集のいくつかの作品を読んでみても，Pearl Buck の言う「構成形式」が，この選集を理解する上で，特に重要だとは思われない。なるほど，特別な構成形式がとられているのはわかるが，それは選集にとって不可欠な要素というよりも，あと知恵として意識的に思いついたものであろうと思われる。また，Pearl Buck は，中国人の不撓不屈のたくましさを強調したいとしているが，その顕著な特徴も何編かの作品に見られる。事実，逆から書く，つまり，中国人の抵抗という着想を予め立てておき，そのあと，論点を主張する筋立てや人物を設定して書かれていると思われるものがある。

Today and Forever 短編集の大半の作品は，対日戦争における中国人の奮戦ぶりに関係した内容のものだが，その大部分は，あまりにプロパガンダ色が濃く，信じられない物語である。どちらかと言えば，こじつけの人物を配し，ハリウッド調の性格を帯びている。例えば，Tiger！　Tiger！　という作品では，筋立てが現実離れしている。アメリカ教育を受けた中国の少女が，留学を終えて，裕福な父のもとに戻ると，生活が退屈になる。そこで，彼女はその地方で重税をかけている盗賊の首領を訪ねる決心をする。その隠れ家に着くと，年老いた首領の息子が，すでにその指導権を握っている。話のわかる，穏やかなタイプの男のようである。彼女はその男と恋仲になり，結婚する。しかし，間もなく，その男は別の盗賊の首領の本拠地を攻略しようとする。彼女は夫に，戦争にならないよう強く説得する。やがて，夫は相手の強盗団に逮捕されてしまう。彼女はわざわざ飛行機をチャーターして，山岳地帯の敵陣へ乗り込む。彼女と夫は，そこを脱出する。そして，盗賊首領である夫は，部下達を日本軍との戦いに当らせ，その指導者となる決意をする。

奇抜で，大胆で，誇張の多い，この形式は，この短編集を通じ，大部分の作品に応用されている方法である。ただ一編だけ，明らかに異質な作品がある。The Angel という短編で，これは Miss Berry という中国派遣の未婚のアメリカ女性宣教師のありのままの姿を描いた物語である。Miss Berry は孤独な完全論者だが，ノイローゼになり，体調をくずしてしまう。中国人の召使いや伝道事業の協力者達が，彼女の思い通りに働いてくれないからだ。これまで身を粉に

して伝道活動に献げてきたMiss Berryは，共に暮し，共に働いてきた中国人達が，どうも好きになれなくなる．彼女を満足させてくれるほどの清廉さもなければ，勤勉さもない．彼等と仕事を続けると，息苦しくなり，無気力を感じさえするのだった．結局，欲求不満が募り，断崖から飛び降り自殺をはかる．この物語には，リアリズムがあり，The First WifeやThe Rainy Dayと相通ずる真実性がある．と言うことは，Pearl Buckの最良の短編小説は，リアリズムの手法で書かれたときのものだ，ということを示している．もし，ロマンチックになり，センチメンタルになり，あるいは，冒険物語の単なる語り手になると，作品全体の締まりを維持する鋭さが失なわれてしまう．

Pearl Buckの第三の短編集For and Near (1947)には，Stories of Japan, China, and Americaという副題が付いており，幅広いテーマ，さまざまな物語形式を取り混ぜてある．例えば，ニューヨーク市の調製食品販売店の経営者とその妻の写実的描写，アメリカのGIと美しい日本の少女をテーマとした二編の喜劇的エピソード，劇映画となり日本でもおなじみのThe Teahouse of the August Moonにまつわる思い出話，夫婦間の数編の家庭劇，それに，中国の賃金の安い雇用者を調達するため，業務で中国に戻ってくるアメリカ人家族の，説得力に欠ける，浅薄な風刺物語，といったものなどである．以上の作品はすべて，軽妙で創意に富み，物語文学としての強い魅力はあるが，概して，内容が取るに足るほどのものでもないので，すぐ忘れ去られるたぐいの作品である．しかし，中には，大衆娯楽雑誌のもつ現代的雰囲気を漂わせている作品もある．The EnemyとかThe One Womanといった作品がそれで，洗練され，つやがあり，そして，台詞の扱い方のうまさが目立っている．しかし，結局のところ，かなり出来栄えがよく，要求を満たすと思われる短編は，この選集の中で僅か三編しかない．それは，The Tax CollectorとEnough for a Lifetime，それに，The Truceである．

The Tax Collectorという作品は，中国の小村の地方税徴収官に対する住民の反応を描いた，娯楽的な小品である．そこに描かれる誇張も，僅かな眞実も，記憶に残るような，楽しい，独創的なものである．ふざけた調子で書かれているが，徴税官YangがLiehsaという，美しい村娘を内妻に迎えようとする決意

を主題としたものである。Yang がたまたま乗っていた，旧式のバスが，盗賊に襲われ，金品が奪われると，彼は盗賊に略奪金の三分の一を要求し，受け取る。この措置に激高したバスの同乗者達は，Yang を山の斜面に突き落してしまう。結局は，このバスの運転手が若い Liehsa と結婚し，めでたしめでたしということになる。物語の結末は，どうみても非現実的で，盗賊の描写も現実性に乏しいが，この手法が，まさに Pearl Buck が追求しようとする効果的狙いなのである。この短編は，彼女のユーモアに見られる，最も一般的な特性，つまり，滑稽さと誇張さを例証したものなのである。彼女の作品全体に見られるわけではないが，彼女の書く喜劇は，物語が誇張型か，あるいは，明らかに調和しないバラエティー型かのいずれかで，その全体の調子も穏やかである。

Enough for a Lifetime という短編は，在中国の38歳になる未婚の女性宣教師の物語である。彼女の名は Amy Willey といい，恋愛の経験がない。先任者の厳しい指導や牧師館の厳格なおきてのため，どうしてもわびしい，孤独な生活を余儀なくせざるを得ない。ある日，彼女はアマチュア劇団の The Barretts of Wimpole Street という出し物に，Elizabeth Barrett Browning（1806-61：イギリスの女流詩人，Robert Browning の妻）役で主演する機会を得る。そのおかげで，彼女はしばらくの間，相手役のハンサムな主人公と恋をする気分になる。役柄を完全にこなしている。主人役の男が，別の女を愛していることを知ると，彼女は幻滅を感じる。しかし，心の中では愛情が芽生えているのだ，と反省する。Robert Browning が愛とは何かを彼女に教えているのである。それからというものは，人生に潤いを与えてくれる，この教訓をずっと記憶にとどめようとする。役柄上の愛情を経験する前の Miss Willey の生活の味気なさ，経験後の，一新された目的意識が，鮮明に伝わってくる。現実と夢の世界を対比する，古い物語的技巧，つまり，ここで使った演劇上のエピソードにより，これからの生き方に対する Amy Willey の反省の取り上げ方に新鮮味が生れ，反省の論理が力強く伝わってくる作品である。

The Truce という短編は，始終，口論している不幸な夫婦を描いた作品である。妻の Elizabeth Bond は，いくら努力しても，愛情のない夫婦生活はどうにもならないことを，突然悟る。これまでは，こんなことを決して認めようとは

しなかった．この解決策は唯一つ，共に自由になれる離婚だけだ，と考える．如何にもありふれた問題を扱っているようだが，Elizabeth Bond が，若い，未熟な考えを持っていたころから，苦境に直面し，大人らしい理解を示すようになるまでの成長過程が，痛烈に描かれている．

Pearl Buck の最新の短編集 Fourteen Stories は，1961年に出版され，これまでの短編集の中で明らかに大衆娯楽的な作品集である．物語はどれも，個性に欠け，はじめから大衆雑誌向きに書かれたもののようである．文体が滑らかで，読み易く，調子がロマンチックである．何編かの作品をざっと目を通しただけでも，明らかに甘ったるい独得な味が感じられる．例えば，老人が病院で死ぬと，その愛妻がさめざめと泣くとか，また，この近くのベッドに寝ていた若い患者が，その様子を見て，愛情の価値を悟るとか，若い婚約者同士が，ある期間不信感を懐き，それから，お互いが眞に愛し合うようになるとか，不器量な妻が，いつも楽しくしようと努める姿を見て，夫は，妻が不器量だということを忘れるとか，子供が，その叔母と演出者の愛の橋渡しをする，といった具合である．

Fourteen Stories に収められている短編は，大部分がこのような傾向のものだが，ただ一編だけ，この枠を越える作品がある．The Silver Butterfly と題する短編で，現代の中国人民公社の人々にまつわる物語である．ある老女が，人民公社にいる子供へ家宝の装身具を一個与える．誰もが所持しているという代物ではないので，その老女の行為は，共産主義理論から逸脱したものとして訴えられ，公社の会議で罰せられる．中国では，新しい橋が次々と架設されると同時に，その他の建設も順調に進んでいるが，その割に人民は，相変らず苦しい生活を強いられる．この物語は，The First Wife や The Rainy Day といった初期の短編と同様，有りの儘を描いている．迫力があり，説得力がある．この短編集の中では，読む者の心に長く残してくれる唯一の作品である．

The Silver Butterfly と，どちらかと言えば，明らかに農民弾圧の解説であり，愛国的でプロパガンダ的な，平凡な物語である Parable of Plain People（この作品は，反共的だが，初期の反日，親中戦争関連の作品に似ている）を除けば，Fourteen Stories 短編集の作品はどれも，大衆雑誌志向を十分意識して書かれたものであ

る。これらの物語の内容は，あまりに情にもろく，華やか過ぎる傾向がある。優しさ，ロマンス，常識などすべて，現実味がない。Richard Sullivan が，この Fourteen Stories について，ニューヨーク・タイムズ紙の論評で述べているように，「この短編集には，技巧があり，思い遣りがあり，すばらしい好意がある。決して軽率なところがないし，有意義な事柄を扱っている。意図もしっかりして，期待のもてる作品集ではある。……しかし，万事が常にうまく，きちんと解決されてしまう。……そして，これらの短編は，人間的経験を少しでも健全で人道的良識と，極めて優れた意図をもって解決しようとする，魅力的な問題を提示している。よい物語だからと言って，滅多に問題をうまく解決してくれるものではない。よい物語とは，単に華麗な言葉で飾ってあるに過ぎない[21]」のである。

Pearl Buck の短編小説は，どちらかと言えば，秀作を書いた初期のころから，すでに凋落傾向が始っている。The First Wife, The Rainy Day, The Angel, Enough for a Lifetime などの短編は，文章が整然としており，リアルで，性格描写が鋭い。しかも，古風で，伝統的な物語文学の手法をとる，卓越した作品例でもある。しかしながら，Pearl Buck の大部分の短編小説，特に近年に書かれた作品は，如何にもセンチメンタルで，非現実的であり，大衆娯楽志向で，詩的感覚や複雑さに欠けている。1950年代の後半に，Pearl Buck は，「今後，他人を喜ばせ，楽しませる作品を多く書きたい」と述べている[22]。確かに，彼女の期待通り一般の読者を喜ばせ，楽しませてくれる作品を発表したが，一握りのリアリスティックな作品を除けば，象徴的な分析，文体的な魅力，それに，芸術的な目的と意義という視点から考えると，期待したほどの文学的高度の水準に達しているかどうかは疑問である。

〔注〕

(1) Time, March 19, 1973, p.81.

(2) Theodore F. Harris, Pearl S. Buck.
A Biography (New York : Day, 1969) , I, 270.

(3) Elizabeth Janeway, " The Optimistic World of Miss Buck, " New York

Times, May 25, 1952, Sect. 7, p.4.

(4) 佐藤重夫「Pearl S. Buck のノーベル文学賞受賞の背景に関する考察」中央学院大学総合科学研究所，紀要，第5巻第1号，1987年10月，pp.169-174.

(5) Helen F. Snow, " Pearl S. Buck 1892—1973 : An Island in Time, " New Public, March 24, 1973, pp.28-29.

(6) Ibid., Chapter 3 参照.

(7) Pearl Buck, Of Men and Women (New York : Day, 1971) , p.67.

(8) Herbert J. Muller, Modern Fiction : A Study of Values (New York : Funk and Wagnalls, 1937) , pp.324-28.

(9) Elizabeth Janeway は，Pearl Buck に関する論評の中で，この点について指摘している．その一部を引用すると，Janeway 夫人は，「Buck 女史の長所は，現代の批評家におもねるようなことをしない点であり，短所は批評家にとって，あまりにもはっきりしており，面白味がないということで，批判すらできないという点である．人心の内面世界にいどむ苦手を主題とする場合に，彼女はできる限り普遍的な人間環境を，より好んで取り扱う．登場人物は主題に合わせ，好みのタイプに近づけることが多い．特に，激しい悲観論に落ち込んでいくような知的世界の中にあっても …… Pearl Buck女史は楽観論者である」と述べている．Elizabeth Janeway,p. 4

(10) Pearl Buck は，大多数の人々は善人だ，という印象を常に与えている．悪人が作品に登場するのは，全体の割合から見て，極く僅かである．しかし，晩年には，生れながらに善人で正直，そして，情ある人々に対する考えを改めている．Pearl Buck, Mrs. Stoner and the Sea, and Other Works, (New York : Ace, 1976) , pp. 156-57. 参照.

(11) Pearl Buck, American Argument, p.201.

(12) Pearl Buck, " The Artist in a World of Science, " Saturday Review, Sept. 20,1958, pp.15-16, 42-44.

(13) John Osborne (1929—) は，イギリスの俳優・劇作家で，1948年19歳で初舞台を踏み，イギリス演劇協会に加わり，舞台に立ちながら，1956年 Look Back in Anger という戯曲を書いている．その中で，現代社会の矛盾とその中で生きる若者達の焦燥感と反抗を描いている．

(14) Pearl Buck, American Argument, p.203.

(15) Theodore F. Harris, I, 294-95.

(16) 特に困ったことは，1939年以後 Pearl Buck が文学を教訓指導の伝達手段として強調した点である．1933年，母校 Randolph-Macon Woman's College の同窓

会での演説で，彼女は，「本当の芸術家というのは，説教師となってはいけない」と，自ら言及している。しかし，時が経つにつれて，彼女は人道主義に関心を持つようになり，できるだけ多くの読者に影響を与えたいという願いが強まってきたため，不幸にも，ますます教訓主義へと引き込まれていった。従って，彼女は「教訓を与えるのは人生であって，小説家ではない」という，初期の視点を否定するようになった。

(17) John L. Bishop, "Some Limitations of Chinese Fiction,"Far Eastern Ouarterly, 15 (February 1956), pp.239-47.

(18) Hayes Jacobs, "Pearl S. Buck," Writer's Yearbook 1963 (Boston: The Writer, Inc.), p.40. の中で，Jacobs は「アメリカ文学史の中で，ヨーロッパやアジアにおける人気の点で，Pearl Buck に接近している作家は，Mark Twain だけである」と述べている。Spiller 著の Literary History of the United States (New York : The Macmillan Company, 1948), II, 1383-84 にも，Pearl Buck が海外で有名であることを立証している。

(19) East and West and the Novel ; Sources of the Early Chinese Novel (Peiping : North China Union Language School 〔California College in China〕, 1932), p.15.

(20) 後に The Chinese Novel (New York : John Day, 1939) と題して出版された。

(21) The New York Times, December 17, 1961, Section 7, p.20.

(22) American Triptych (New York : John Day, 1958), p. viii.